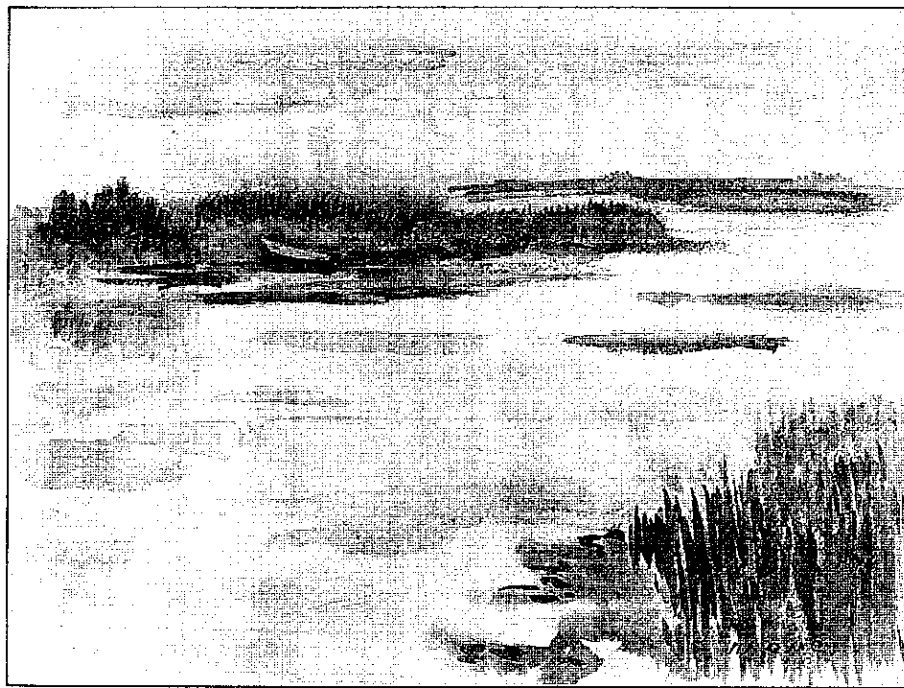


# 津高同窓会報

発行所  
津市新町3丁目1-1  
津高等学校  
同窓会事務局  
0592-28-0256  
共立印刷株式会社



晩秋 日展会友 小野雅生 (昭和20年卒)

# かえりふみの微笑み

## 津高漕艇百周年開催

- 関心.....2面
- 美人・美人.....4面
- 吉原会長が船艇展開催3面
- 世界婦人会議に参加して5面
- 野球部と私.....3面
- 津高の印象.....5面
- 津中時代の思い出.....6・7面
- 異動.....6・7面
- 旅と私.....4面
- 61年度入試について.....8面

2面

## 同窓会長 吉原一真

(昭和8年卒)



六十一年の晩夏、東京参宮橋前で津中学校のクラス会が開かれた。駒田駿太郎、井田勝造、近藤典生など半世紀ぶりに出あった優等生

## 二 挨拶

### 学校長 林道明



本年四月、図らずも津高等中学校校長を拝命し赴任いたしました。校門を入つてまいりますと巨大な

桶やゆりのき、ヒマラヤ杉などが平亭と見え、津高の第百世紀の歩みを静かに見守つており、気品ある登壇の姿を感じさせられました。

同窓会の皆様は、国の内外各地各界にますます活躍のことと拝察いたします。つねに日頃母校

最後に皆様の益々の発展とご健勝をお祈り申しあげ、ご挨拶とさせていただきます。

## 皇室記者のこのころ

岸田英夫 (昭和23年卒)



年卒の大井貴司のジャズ演奏、いづれも異色の同窓生だ。同窓会はいままで、マンネリ化しているきらいがあったが、こじは全くちがっていた。私はニューヨークのダウンタウンを思い出して、同夜祭を含めて七〇名に及ぶ同窓生が、しらずしずのうちに肩をゆきぶり、老いも若きもジャズに酔っていた。とび入りの水森雄士さんもおかしなせりふで爆笑をさせていた。新聞は暴風や、双羽黒の出現以上にジャズバンドととりあつていった。

十月十一日から四日間、天皇陛下の山梨団体ご出席に同行。報道バスでお列に加わり、富士山麓の樹海を観望される陛下に「二二二と離れぬとこで、お元気を機子と拝見する。八十五歳というのに旺盛な知能は少しも衰えず、説明後の種物学者に盛んに質問されていた。

後日、家敬祭があつた。大正期に卒業した宇野さんにさきわれて私も出席した。静岡高校の旧友も五六名でいた。私は多少の遠慮も味だつたが、黒いドレスの美人にうながされて立ちあがりロンドをくんだ。黒いお下げ髪をゆつとあんだ若い娘の髪に感動し、ついでに力が入つた。こんな元氣が残っているのだから、まだまだ旭丘や愛知一中に勝つ者だ。それはかえりみてのほ、えみひに通じるものがあつた。

同日の夕刻、東宮御所で養育子妃陛下の記者会見。天皇、皇太子ご夫妻、浩宮、常陸宮ご夫妻は記者団と会見されるのが恒例。記者団は現在、新聞放送させて十五社、二十五人、土曜日が、会見の終つたのは七時近かつた。お妃陛下で、時々の、浩宮陛下が二十日から五日間の日程で鳥取島へお出かけの史跡めぐり。あつた山に登山、浩宮のお妃がどのまに泳ぎつくるのか、いつときも目を離せぬ。……といった具合にこのころ、皇室記者はまことに忙しく、緊張の連続毎日だ。朝日新聞社会部記者として警察部庁、国会等の担当を経て宮内庁詰めになつたのは四十四年秋のこと。以来、「週刊朝日」副編集長兼文庫より出版された。

# 式典・祝賀会ひらく

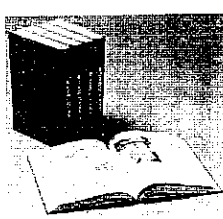
シエルフォア・ナックルフォア・ダブルスカル・シングルスカル各一艇

## 母校へ競漕艇贈る

去る十一月三日(文化の日)、母校津高百年記念式典は、大西宣人氏ら名古屋シナイ奮闘団による木管五重奏の奏でられる中、十一時に開会。木下実行委員長

の式辞で幕をあげ、市長、同窓会長、津高旭丘高校漕艇友会長らが祝辞を述べました。「あ、母校」の姉妹篇として、四五〇ページにわたる津高百年記念誌「見よ蒼溟」につづきたる一刊行の経過について神田編集委員長が報告、直接編集を担当した井上氏は母校漕艇百年のあらましを語りました。

引きつづいて、津・白塚各漁協伊勢湾海洋センターにたいして日頃のご協力を謝し感謝状が贈られました。また、去る九月十八日、岩田川で開催された百年記念レガッタを撮る写真コンテストに応募し、入賞した松島文雄(金)、牛場和美(銀)、藤原忠綱、田中晴大綱の各氏に賞状が贈られました。



が表彰を受け、写真家・長島野生さん(昭和二十年卒)の講話をききました。実行委員会では、母校に寄る後輩たちが勉学のかたわらボートに乗って、体力を鍛え、気持ちを明るく持つてがんばってほしいという願いから、同窓生の皆さんに広く募金を訴え、競漕用ボートを母校へ寄贈しました。

これに対し、林校長は親しく謝辞を述べました。寄贈された艇種は次のとおりです。

シエルフォア一、ナックルフォア一、ダブルスカル一、シングルスカル一

多勢の各位にご支持ご声援をいただき、いろいろな行事を次々と成功させていただいております。実行委員一同に代りまして心より厚く御礼申し上げます。

私どもが、最初申しましたように、母校のボートは一握りの部員のものというよりは、全津高生、全津高生の象徴であり、これらもこのことは変ることなく、母校のボートのあり方として引かれて

# 相づくボート百年記念行事



去る七月十五日に母校の校内レガッタがOの協力のもとに久々に開催されました。在学生たちの中には、ボートレースをはじめとする、来年はぜひクラスの選出で出たい「津高」こんな艇庫があったのか「来年もつづけてほしい」など、にわかにボートに熱意が湧きました。全教職員、全校生徒が岩田川畔に勢揃いして自分のクラスのクルーを応援しました。

## 全校、校内レガッタに湧く

光景はかつてなく、大編成のフラッグバンドが吹き鳴らす軽快な曲が川面にひびきました。

おりからつめかいた報道陣は、NHKをはじめ各放送も、当日の夕方ニュースで全国ネットで流し、各新聞は久々の校内大会を写真入りで大きく扱い、津高ボート百年の名を散らばりました。

又、全国に散らばる同窓生からは声援の電話が相ついで寄せられました。

おくつてくれたらといふ念願です。句碑びらきのときには、目下編集中の小冊子「素逝句碑」もできま

す。宇留田銀香氏が、長谷川素逝全句集よりえらんで下さったお

## 生徒らと 五月の朝の 窓あけて

素逝

実行委員会、ボート部にゆかりの深い長谷川素逝先生の句碑

を学校内に建立することを計画し、選手でした。昭和九十九月、母校

部長として活躍されました。学生

時代の俳句を志し、支那書院に

今回の建立が母校に学ぶ在校生

たちの気持ちに、さわやかな風を

草花洞氏の予定です。

おくつてくれたらといふ念願です。句碑びらきのときには、目下編集

中の小冊子「素逝句碑」もできま

## 感謝のことば

木下 寿

(昭和七年卒)

同窓生のみならず、私共があつかましくも、言い出しつべになり、母校津高百年を祝う諸事業、諸行事を提案いたしましたところ、役員会をはじめ思いもなかつた

が表彰を受け、写真家・長島野生さん(昭和二十年卒)の講話をききました。

実行委員会では、母校に寄る後輩たちが勉学のかたわらボートに乗って、体力を鍛え、気持ちを明るく持つてがんばってほしいという

このことばは、比較的新しい世代の人は年次によつては出席者が多々たる有様である。津高卒の年次の若くなるに従って、その関心が次第に薄れてゆく傾向が現われているように思える。そこで世話をし

る。同窓会に示す関心の度合は出席人員で示される。会員が年々増加している現状からも、出席人員が増えてよいのではないかと、陳

## あと一息!

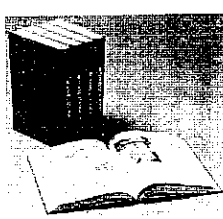
去る九月十三日に大阪支部幹事

会をホテル阪神で開催。来る十一月十六日(即)の総会の準備に入り、

母校津高百年記念募金は、みなさんのあたたかい理解とご協力、目標額へと一息のところまでできました。

同封いたしました振替用紙をご利用の上、何卒、大勢の方々に、たとえ、おいくらでもご協力いただければ幸いです。

なお、一万円以上、寄附された方には、津高漕艇百年記念誌を折り返し送らせていただきます。数量に限りがありますので在庫のあるかぎりとしてさせていただきます。また免税措置もとられています。



ゆくだらうと思ひます。みなさんのご協力によりまして地域社会に、それにもまして母校に在学の後輩津高生諸君にボートにたいする関心が少しでも高まりましたことを、私もたいへんよろこんであります。

どうか、いつまでも相寄りませぬご後援を賜りますよう伏してお願ひし、感謝のことばといたしま

す。お世話させて頂くことになり同窓会を如何に発展させるかと頭を痛めている。

## 旭丘高漕艇友会招き 百年記念レガッタ開催

去る九月十八日、母校津高百年記念レガッタは、愛知一中、旭丘高漕艇友会を招き、岩田川河口で盛大に開催されました。

六十歳以上、五十歳台、四十歳台、二十歳台、二十歳台以下に別れて、それぞれに制限を受けるのが少く又行動に制限を受けるのが一番大きな原因と思つたが、それ以外に年配者の多い会合には何となくし馴染みのない、これを敬遠するのではなからうかと、これを敬遠するの念を抱かざるを得ない。同窓

会に出席しなくとも口常の仕事と生活には何等影響の無いことは事実だが、一面大切な人的なつながりを持つことも今後の実社会に

## 関心

小津 正次郎

(昭和七年卒)

野田博実会長から野田道郎前会長を経て三代目の会費としてお世話させて頂くことになり同窓会を如何に発展させるかと頭を痛めている。

去る九月十三日に大阪支部幹事会をホテル阪神で開催。来る十一月十六日(即)の総会の準備に入り、

# 吉原会長叙勲祝賀会開催



六十七年七月二十六日正午、春の叙勲で勲二等瑞宝章を受賞した吉原同窓会長の祝賀会が津市ホテルで開催された。三重県知事、県会議長、津市長、津高校長をはじめ県の政、財界、同窓会の人々が出席して受賞を祝った。

## 吉原君おめでとう

谷口二郎(昭和22年卒)  
昭和57年頃、吉河の校舎に絵の好きな一人の少年がいた。また美術教室で林山羊先生と話している彼を覚えていた。彼は陸上競技部にも所属していた。短距離が専門で、毎日丸太人棒のような太い足をたくましく動かしてタツシユの練習に残りかえっている姿が妙に印象に残っている。彼は同窓会長吉原一真君である。

# 津中時代の思い出

加藤 精 一(昭和22年卒)



我々の青春時代は正に混乱の時代であった。そして、価値観が一瞬にして変化した。その故か、私は物事をみる時、いつも懐疑的になる。確信が持たない。訪書も作ってやるより、相手の動きにあわせてしまふ。この性格は、終戦をはさんで津時代に作られたように思う。青春時代、特に津中における五年間は、他の時代の二十年、三十年の変化を凝縮して味わった。

藤太郎先生(軍事教官)の激しい訓で始まった。おっとり育った田舎の子供から大人への転換を一挙に求められた。いよいよ中学生だと思った。各先生の講義にも熱が入っていた。静かに静々と説かれる英語の野間先生、敢えていうと、声を絞って話された歴史の野田先生の姿、飄々とした木葉先生、全その先生が魅力的であった。もちろん軍事教練も厳しかった。軍事教練は徐々に強まってきた。だが、入学した当時の津中には、伝説的な重一中の姿が残っていたように思われる。しかし、それも東の海、まず、勤労奉仕で近在の農家に稲刈りなど農作業の手伝いにいくことが多かった。辛い時もあつたが、この勤労奉仕は、

それなりに喜びもあつたように思われる。戦争が激しくなると、我々は労働員で工場へ行くことになった。始め四日市の東洋紡績の二番の工場に入った。これは私が初めて工場に入った。これは私がおぼえていた実社会と、これは海軍の兵隊さん達にまじっての作業であった。しかも寮に泊り込んでいた。当時すでに食糧事情は悪くなつてた。工場の仕事を通して、我々は色々勉強する部分もあつたように思う。

戦時体制の中、我々は名古屋工場へ移動した。四日市当時より状況は一段と厳しくなつた。その名古屋工場は爆撃を食つて我々は津にもどり、半田の山で地下工場作りのための穴掘りに専念することになった。そして、津の爆撃を体験する。大変な被爆であつた。多くの死者を自の当りにした。死体を焼く煙もみた。やがて終戦も生れた。

今、私の属する証券界は国際化四十六年が流れたが、学生、軍隊、抑留、民間公職と、その時代の生活、仕事を通して心のきさえとなり、また励ましてくれたものは津中時代のさまざまな体験をおして得たものであることを感じる。昨今である。

昭和十年四月、入学と同時に野球部にいられた。もちろんグラウンド整理、ボール拾い、道具の出し入れの毎日であつた。上級生が名前をよぶとき呼び捨てでなく必ず「〇〇氏(ウシ)」と呼びあつてゐることを極めて奇異に感じたものである。上級生の年頃になると大人っぽさが、普段の言動にも強くなりだしてきて頼もしく思うとともに、一日でも早く上級生になりたいと憧れをもつたものである。

入部して、二、三ヶ月たったころ、練習中、二年先輩にたいして姓でなく名前を「〇〇ちゃん」と大きな声で呼んだところ、そばにいた大國教頭(極めて厳しい先生で有名であつた)に「さらい!」と掃除用紙で横殴りされた。何故か知らなかった。今でも分からない。たぶん先輩を呼ぶ態度があまりにも馴れ馴れしかったので叱られたのであつたと思ふ。このように先輩と後輩関係のじめじめ、同級生間でも敬愛、お互いに人格を尊重しようとする態度が、代りあつても三重一中の誇りとともに日常生活の中にまで燃然と

選層も早や過ぎ、人生第一、第三の生活に入る年代となつたが、おかげで元気に仕事に取り組んでいる。津中を卒業してから早くも

昨日まで教えていたことが悪どな今日からはこれが正しいものとして生徒に与えなければならなかつたのは苦しい立場であつたと思はれる。

だが、意外にはやく、与えられた民主主義は定着し、我々も平和を徐々にとりもどしてゐた。多感な青春時代を、あまも和らげ、混乱の中におかれて、権威の移行、思想の変化、激しい生活環境の変化にまきこまれ、私利性格は、屈折のうちに極めて複雑なものになつたらしい。その反面、変化に対する対応力は抜群といつた自信も生れた。

今、私の属する証券界は国際化四十六年が流れたが、学生、軍隊、抑留、民間公職と、その時代の生活、仕事を通して心のきさえとなり、また励ましてくれたものは津中時代のさまざまな体験をおして得たものであることを感じる。昨今である。

入部して、二、三ヶ月たったころ、練習中、二年先輩にたいして姓でなく名前を「〇〇ちゃん」と大きな声で呼んだところ、そばにいた大國教頭(極めて厳しい先生で有名であつた)に「さらい!」と掃除用紙で横殴りされた。何故か知らなかった。今でも分からない。たぶん先輩を呼ぶ態度があまりにも馴れ馴れしかったので叱られたのであつたと思ふ。このように先輩と後輩関係のじめじめ、同級生間でも敬愛、お互いに人格を尊重しようとする態度が、代りあつても三重一中の誇りとともに日常生活の中にまで燃然と

# 野球部と私

岡村 初博(昭和15年卒)

してゐたのである。現代にも是非その片やも残したいものだ。更に当時、夏の大会が近づくと必ず、東京大学の現役選手がコーチに来てくれた。昭和の初年には、当時ツインパワー早大の小川投手がコーチもあつた。費用も相当かかつたであろうが、先輩の暖かい配慮があつたものと思はれる。一流のコーチにいたこと(これは若し選手に強い刺激をよその助言は生涯にわ

早くというところで特例の会合を持つた。そのため原外は代表者だけとして津を中心に16名が集まつた。

望郷追憶之賦  
経々峰を望むふるさと恋ひつつも異郷にありて老いづける身は  
目覚むれば老いづけるわれ夢にては津中一年甲組なりし身は

以上、私の中学生生活は野球と明け暮れたのであるが、その間は、三重一中としての気概に満ちたものであり、また先生方からはそれぞれ、強い影響を与えてくれたのである。

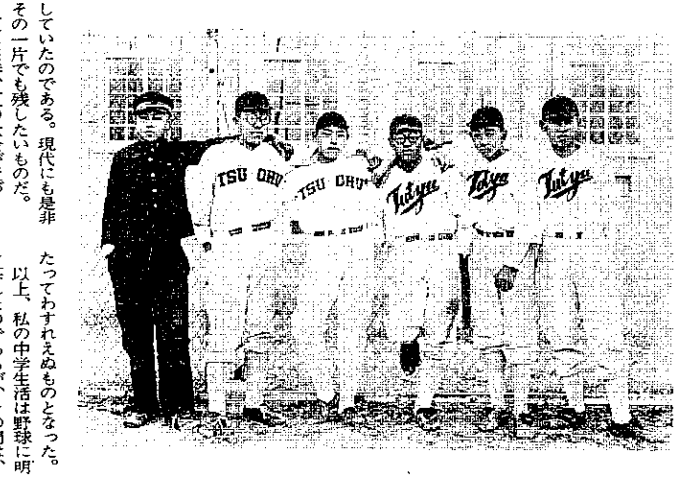
は大変必要かつ有益なことで、決して忘れては行かない。したがって出席することによって大切な人間的なつながりの持てる機会になるよう各人が努力して欲しいとお願ひするのである。

以上、私の中学生生活は野球と明け暮れたのであるが、その間は、三重一中としての気概に満ちたものであり、また先生方からはそれぞれ、強い影響を与えてくれたのである。

以上、私の中学生生活は野球と明け暮れたのであるが、その間は、三重一中としての気概に満ちたものであり、また先生方からはそれぞれ、強い影響を与えてくれたのである。

以上、私の中学生生活は野球と明け暮れたのであるが、その間は、三重一中としての気概に満ちたものであり、また先生方からはそれぞれ、強い影響を与えてくれたのである。

以上、私の中学生生活は野球と明け暮れたのであるが、その間は、三重一中としての気概に満ちたものであり、また先生方からはそれぞれ、強い影響を与えてくれたのである。



川北浩三郎(昭和19年卒) 津市在住医師  
宮田 太郎  
望郷追憶之賦  
経々峰を望むふるさと恋ひつつも異郷にありて老いづける身は  
目覚むれば老いづけるわれ夢にては津中一年甲組なりし身は

# 旅と私

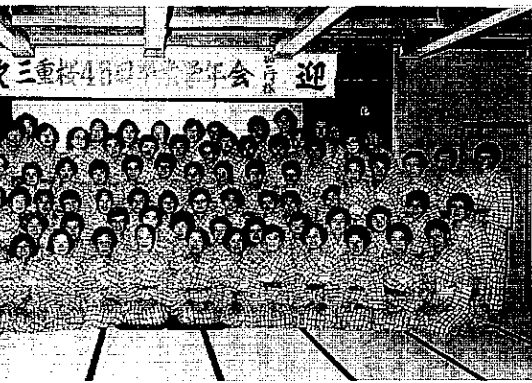
薄田京子(昭和12年生)

子供の夢が済んでようやく旅費の目途がついた五、六代初めから今日までに、土曜程外国を旅行する機会を得た。歩いた国はヨーロッパ8ヶ国、インド、カナダ、アメリカ、フィリピン、イラン、トルコ、ソビエト等である。私の視点は被服および染織品である。人は読書効用を説く。しかし旅は本を読むより、もとリアルで濃密である。陽の光、頬に当る風、

夏の八月、酒泉から一日、長い砂漠をバスで颯が飛び出るかと思ふ程ゆすぶられた後に迎ったのは、これら諸國の五十年の歴史の重味に深い感動を覚えずにはいられない。旅の後二ヶ月程はほげりか醒めず。恍惚として酔った様な心境で過ごしたところである。旅の愉しみは、また、様々な人を観察する面白さにある。こちらも勿論見られていた。私は所属する繊維製品消費科学会、家政学会、日印協会、染織文化協会、民族服飾研究会、母校お茶の水同窓会等の企画に参加する。旅がなければ、一生出会うこともなかったであろうすばらしい師や友を得た。定年から今日まで五年半の間に

# 美人・不美人

黒宮澄子(昭和23年生)



黒宮澄子の想い出 於 黒宮館 1986.9

「過日、黒宮澄子さんの講演を聞く機会があった。その話のなかで、沢村貞子さんの話として「女学校のクラス会に五十年ぶりに出席しました。驚いたことは、女学校時代に美人で有名であった人が少しも美人でなく、そうであった人が美しくなっていたことである。分析すると美人であった人は、若い間は、年と共に周開からかまわれなくなる。おもしろくないので、固定してしまっていて、美人ではない人は、顔で勝負できない分、生き甲斐を他に求め真剣に物事にとり組んでいくうちに、表情も生き生きとした美人になる。だから美人ではない人も悲観する事はない」という事であった。去る九月二日、一年も前から周到な準備を進めて下さった久居市在住の十名余の方々の熱烈歓迎を受けて横浜で学年会もった。二百人余の同級生のうち約半数の九十名が出席し盛大であった。「派手な服で年令をごまかすな」という幹事さんの射りであったのか「全員、胸に名札をつけ旅館の浴衣で集合!」との命令に従い、実年より盛りだくさんの九十名が勢揃いした記念撮影はまさに壮観。後日、家の者に「だれが先生かわかる?」と聞いたところ「みんなおぼやさんばかりでわからない」と言われてしまった。ご出席下さった井上、若先生、別所先生は私達学年令差も少ない上、日頃のからだのきたえ方が違っても、外見は私達生徒の方がずっと先へいつている感じである。関東、関西から参加された方も多く、卒業以来四十年の程変わった方もあったが、気分は全く昔と変わらず、楽しい話しが夜更けまで続いた。幸せな事に、我が幸には若い頃美人はなくなつた。けれど、今では皆それなりに美しく、麗しくつかり固定された顔の人は一人もいなかった。その上、私はクラス会に出ると若返るという事をもつて体験した。クラス会の三日後ほどが急には、慌て、かけ込んだ病院で「おたふく風邪」と診断されたのである。

# 三重桜同窓会総会

今村房(大正12年生)



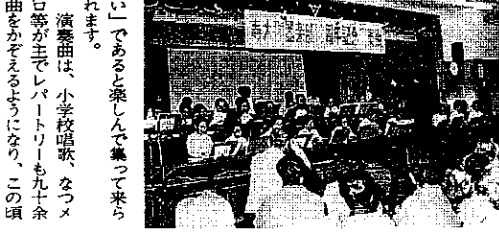
今年の三重桜同窓会総会は四月十三日、津のセンタパレス五階ホールで開催いたしました。お天気も良く十時頃からはぽつぽつとつかしい雨が降りました。三重桜も漸次老齢化し、次第に出席者が減るのではないかと思

をのむ方々等、老若一丸になって姉妹のようにならぬ。三重桜同窓会は今年も盛況におわりました。総会は大正十一年の模様がお元気で、特に大正十一年の皆様がお元気でご出席下さったのは何よりうれし事です。ご同窓の皆さんは、同窓の皆さんが、今年もお元気で一年一回のこの会におきこまざるようお願いいたします。是非出席下さいますようお願いいたします。

# 活躍する三重桜の人々

伊藤ミヤコ(昭和15年生)

三重桜出身の方は各方面で活躍なさっており、今回は大勢の方が心を合わせてとりくみ楽しんでいらっしゃる津ことば。重桜出身者がおられ、この方々は、楽団の様子、お名前も懐かしい。大正十一年を、現代の子に好評の電子鍵盤楽器「キーボード」十数人を主体として、アコーディオン、マリンバ、ピアノ、ビオラ、バイオリン、ギターに打楽器を加えた編成の約五十名からなる楽団です。メンバーの中には、大正十一年卒の桜井重雄君をはじめ、数名の三重桜出身者がおられ、この方々は、さすが当時の卑下の最高級教育を受けた力が発揮して、各楽器群のリーダーとして活躍し、役員としての団の運営に専らされておられます。男子役員も七名あり、陳列・演奏の協力もいたされています。この方達は合奏するところが、音が



ではシェパールの口サマシ、ハイケンスのセラナド等を手がけたりしています。私は創設当初講師として招へいされ、編曲指導を続けました。それぞれの演奏上の個性を伸ばし、且つ楽器の特性を生かして音楽性を高めるよう編曲するのが私の努力してきました。又指導にあたっては「よくわかる指揮「合わせ」」に心がけてきました。何しろ平均年齢七十超という年齢的制約もあり、自分の望む音楽との線、妥協するかが私の苦心といえます。今にして思えば、私もこの楽団の皆さんと一緒に音楽を楽しみ、生きがいにしていただろう、と思う。

# 62年度 三重桜総会案内

とき 昭和62年4月19日(日)

ところ 清少納言(久居市榊原)

備考 会費、日程等詳細については後日学

尚、学年会で宿泊希望の場合は2月末日までに直接、清少納言に申込んで下さい。

尚、学年会で宿泊希望の場合は2月末日までに直接、清少納言に申込んで下さい。

# 世界婦人会議に参加して

中山加代 (昭和29年卒)

「国連婦人の十年」であった昨年、第三回世界婦人会議がケニアのナイロビで開催されました。私も「重代表の一人」としてそのNGOフォーラム(民間女性会議)に参加する機会を得、さまざまな女性と交流することができ、ナイロビ市内の学校等も訪問することができました。

この婦人会議の目的は、「国連婦人の十年」のテーマである「男女の平等」「社会経済の開発と発展」「平和が各地域でいかに達成されたか、その成果と課題を明らかにし、西暦二千年に向けてあらゆる行動を決定すること」にあります。

そのいかに参加したり、ナイロビ市内の交流の中から出された各国女性の疑問は、経済大国日本の女性が差別されているのか?という事でした。具体的には日本では政策決定の場、政府高官、管理職に女性の登用がなぜ少ないのか?日本での男女の賃金格差が大きいのは何故か?日本の女性は結婚・出産で仕事をやめる



のか?家庭科は女性のみというの教育面の差別ではないか?等々です。この事は、あるケニア女性の「日本では女性は教育を受けていないのか」の発言にもよく表れているように思われます。ちなみにケニアでは、職場で女性が働き続けるのは当然であり、大学を卒業して就職すれば男女同一賃金(大卒初任給 千ケニアシリング)が保証されています。

## 母子留学の案内

杉本和世 (昭和38年卒)

少し古い話で恐縮ですが、私は昭和五十八年八月から一年間、ケンブリッジ大学の客員研究員として研究する機会に恵まれました。周囲の温かい援助とご近所のお蔭で母子留学の楽しさを満喫させていただきました。日本では入手困難な資料の収集等を行なうとともに、英国で実際に生活してみれば理解出来ない様々な事に接することができ、今後仕事を進めていく上で大きな収穫を得ました。

国のおかれては立場で全く異なる悩みや問題をいかに解決していくか、どう連携していくのか、国連婦人の十年は終わったけれど西暦二千年に向けて多くの課題をもちながらの再スタートということになりましよう。最後につけ加えさせていたく、ケニアで出会った方々も、私たちが、実に明らかな、生き生きとした生活を送っていた事、そして美しい日々を過ごしていた事が印象的でした。

## 津高の印象

二年五組 トリー・ケスラー

私は、アメリカからの留学生で、日本へ来て、六十二年四月に津高に入りしました。津高とアメリカの

学校は全然違いますから、始めは何も分かりませんでした。でも、学校に慣れて来たにつれ、だんだん好きになって来ました。最初の日から、皆と一緒に津高で生活出来てとても嬉しいです。

津高での色々な授業は本当に楽しいです。一週間毎日の授業があるからです。アメリカでは、一週間毎日の授業を受けません。

津高での授業はとても速くて、習うのが難しいと思います。先生は先生に毎日宿題を出しません。そして質問もほとんどしません。問題が分からない時でも、先生は

説明を求めません。後六ヶ月日本にいても、私はこの事をずっと不思議に思いつづけてきました。私のいたハイスクールでは一年生から四年生までの男子も女子も津高の学生は異性の人や別の差生の人とは余りつき合いません。そして、学生と先生方は友達関係とは違っています。

津高は、とてもおとなしい人々だ聞いていて、この事は本当に驚きました。私は日本語を話す事が出来ませんでした。又大抵の日本人達は余り話しかけませんが、友達になるのは難しかったです。皆は、いつも「おはよう」と「バイバイ」といいますが、会話をしません。でも今、私は日本語が少し出来たので、皆に話す事が出来るようになりました。そして、友達でいて欲しいと思います。私の日本に一年間はとても楽しかったです。

## 追悼

田端先生の思い出

杉野卓治 (昭和19年卒)

田端先生は、京都川村村出身、私は隣りの高岡村の出身で、津中時代、共に津新町まで通った通学仲間である。ただし、私が一学年下であったので殆んど話をすることもなかった。

その津中時代、確か私が四年生の頃であったかと思うが、現在の必修クラブのような部活動が実施されたことがあった。生徒全員が何れかの部に所属し一斉練習をするのである。私は入学以来体操部で活動していたので、この時間は、新入部員の世帯係として、程度を下げたマット運動、跳箱などの練習に当たったのであるが、その中に田端少年の顔があった。

見ると大人しく、余り運動神経が発達しているとは見えなない田端少年がその時どうして体操部を退いたのかと奇異を感じた。この活動は半年で解消したが、津中時代の一時期田端先生と私は、体操部の一員として練習を共にした仲間なのである。

その後、田端先生とは、松阪高校で一年間、津高で八年間、同じ理科の教師として、席を同じくすることになった。

## 立松先生を偲んで

分部 絃一 (昭和38年卒)

「写真を探して欲しいのだが、又振り先に先生のお声を聞いたのは津高創立百周年の春であった。先生は記念誌の編集委員をされておられ、校舎火災(37.12.2)の写真をお取り頂けた。先生は津高女津高と華蔵さんか、学校運営の仕事が長く、ホーム担任は一回だ

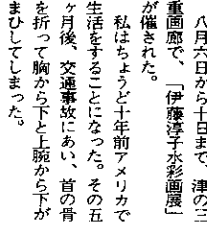
お祈り申あげます。篤学院専攻心居士 合掌

く、我々昭和38年9月組が最初である。ホーム担任、校舎火災と印象深い年であったと記憶されてきた。余りにもあつけない別れで「刈干切唄」も「トドの肉」も一瞬のうちに思い出となっていった。

今後は、先生のご冥福を祈るばかりである。(津高校教頭)

## 個展を開催して

伊藤淳子 (昭和39年卒)



八月六日から十日まで、津の三重画廊で、「伊藤淳子水彩画展」が開催された。私はちょうど十年前アメリカで生活することになった。その五月後、交通事故にあい、首の骨を折って胸から下と腕から下がまひしてしまいました。

二年後皆々のお力添えで個展を開くことが出来た。会場には二千人もの方が来られました。そして、この五日間に懐しい恩師の先生方にもお会いすることが出来、大変うれしく思っています。



この夏の経験を通して、私は米国の友人達に誇りをもつて言えることができるのは、日本人のチームワークはひとりひとり思いやりと責任感があるからだ。そして最後に準備、世話の皆様、色々な形で支援して下さいました。専門的アドバイス下さった皆様方に感謝申し上げます。

お知らせ

昭和六十二年度同窓パーティー

☆昭和六十二年度の同窓パーティーも津センターパレスに決定
とき 昭和62年8月1日(土)
じかん 午後三時より
ところ 津センターパレス(三重会館前)

61年度同窓パーティー報告

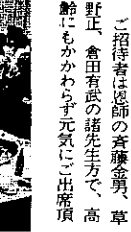
小倉 昌行(昭和40年卒)

八月一日、例年無い盛大な同窓会の幕開けとなりました。若い方々の出席を期待し、新しい発想で二十八年卒の方々が中心となつた今年度の企画を考えました。

最後には私共四十一年卒の若輩が二十八年卒の立派な諸先輩と共に今年度の同窓会を企画運営出来たことを誇りにおもいつつ、厚く感謝申し上げさせていただきます。

61年度入試の総括と来春の入試について

進路指導部長 出口 健正



招待者は恩師の斎藤金男、草野正、倉田有武の諸先生方で、高年齢にもかかわらず元気にご出席頂

六十一年度(六十二年)百卒入試では、第二次シブーム世代の登場によって、高卒者が昨年度の百三十七万人から百六十八万人へ、二十五万人もふえ、この春

私立大については、ベビーブームによる受験者増と理系人気を反映して、中堅私立大に受験者が殺到したために、現役理系志願者は苦戦をいられたが、早稲田

本校の場合、国立大については、昨年に続き百の大台(二百十八人)にのせることができまし

同窓会前夜祭を開催して

飯田 通嗣(昭和28年卒)

私たちが28年と40年卒の同窓生が今回の幹事である。どのような企画をしようかと意見百出の結果、前夜祭をぜひやってみようという事になった。

私たちが28年と40年卒の同窓生が今回の幹事である。どのような企画をしようかと意見百出の結果、前夜祭をぜひやってみようという事になった。

予告 昭和四十六年津高卒の集い

津高卒の集い

予告 昭和四十六年津高卒の集い。津高卒の集い。津高卒の集い。

Table with columns for university type (National, Public, Private, Short) and years (61, 60, 59). It lists the number of graduates for each category.

Table with columns for university names (e.g., Keio, Waseda, Meiji) and years (61, 60, 59). It lists the number of graduates for each university.

二十周年を祝う

津高同窓会 二十周年を祝う。津高同窓会 二十周年を祝う。

クラブの活躍。クラブの活躍。クラブの活躍。

事務局長より。事務局長より。事務局長より。

大卒、企業関係の方は少ない。大卒、企業関係の方は少ない。大卒、企業関係の方は少ない。

津の花火大会と重なり入場者数を心配したが満潮となり、しかも企画も大成功をおさめた。津の花火大会と重なり入場者数を心配したが満潮となり、しかも企画も大成功をおさめた。

同じ釜の飯を食った同窓生というものは、実にいいもの。同じ釜の飯を食った同窓生というものは、実にいいもの。